

東京都庁舎

「東京都・新宿区」

東京都庁舎が丸の内（現在の東京国際フォーラムの場所）から新宿への移転を完了したのは1991年3月のことだった。「移庁作戦」と銘打たれた移転作業は周到な準備のもと前年10月に始められ、輸送に要した2トントラックは延べ約3500台にのぼった。都民サービスと行政の停滞を招かぬよう、作業は毎週末と祭日に進められ、1991年4月1日に新都庁舎がスタートした。

新旧両方の都庁舎を設計した人物が、丹下健三だ。33の国・地域で350以上の建築を手掛けた丹下が、世界で最も有名な日本人建築家であることは論をまたない。設計当時、丹下は72歳。名だたる建築作品や海外の都市計画マスタープランを数多く手掛けてきた丹下は、建築への飽くなき探究心を有していた。世界の“TANGENT”が磨き上げてきた建築哲学を具現化した、世界都市東京のシンボルが東京都庁舎だ。

取材協力

東京都
株式会社 丹下都市建築設計 社長 石野靖博氏（建築家）

参考文献

『近代建築 1991年5月号』（近代建築社、1991年） 『いちよう（移庁）作戦 都庁移転の記録』（東京都、1992年）
『東京都新都庁舎 フォトドキュメント+計画・技術スタディ』（彰国社、1992年） 『Casa BRUTUS特別編集 丹下健三を知っていますか?』（マガジンハウス、2009年）
丹下憲孝著『七十二時間、集中しなさい。——父、丹下健三から教わったこと』（講談社、2011年） 豊川斎赫著『丹下健三 戦後日本の構想者』（岩波新書、2016年）

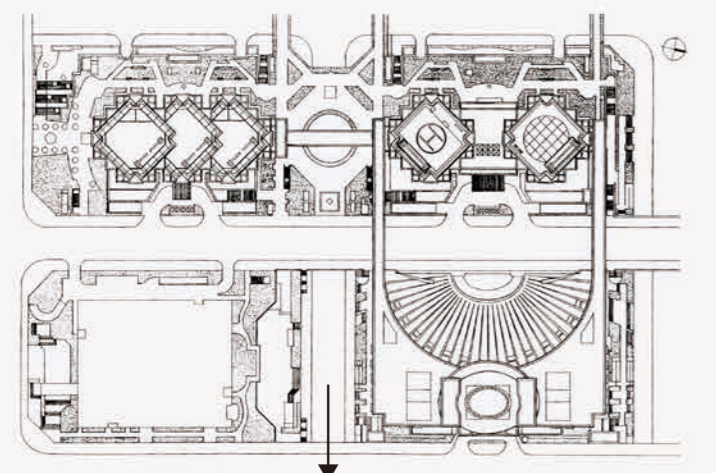
モダニズム建築と「アーバンテイ」の追求

丹下健三は1938年に前川國男建築設計事務所就職し、建築家として出発した。のち大学院に進み、終戦翌年の1946年に東京大学工学部建築学科助教授に就任。広島平和記念公園（54年竣工）の設計で一躍その名を世界に知らしめると、旧東京都庁舎（57年竣工）をはじめ数々の公共建築を手掛けていった。

1960年代に入ると、国立代々木競技場^{*2}と東京カテドラル聖マリア大聖堂（ともに64年竣工）という、時代を超えて日本を代表する建築物を立て続けに設計。1970年の大阪万博ではマスタープランを担当した。中心施設「お祭り広場」のモニメント制作者に、丹下は岡本太郎を推薦。岡本が提示した案は、万博のテーマ「人類の進歩と調和」に真っ向から対峙する原始的な造形「太陽の塔」であり、大屋根を突き抜ける様は後年「岡本・丹下の対決」という逸話を生んだ。実際は岡本の参画時点で、穴が開いた大屋根の模型が先行発表されていた。「太陽の塔」が人々

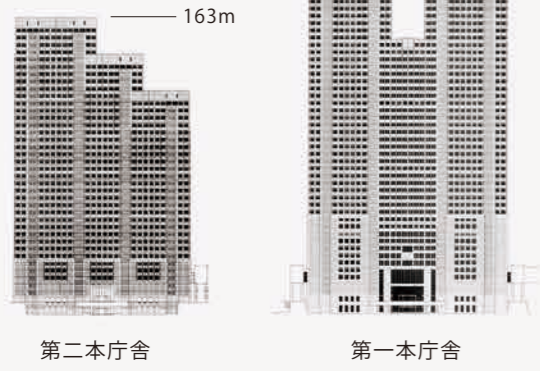


所員が思い思いに模型を作り、丹下が選んだアイデアを磨き上げる。丹下にとって模型はディスカッションの手段だった
写真：©村井修



至新宿駅 243m

第一本庁舎は高さ243m、地上48階、地下3階。近隣のビルには高さ120～150mと200m超の2種類があり、周囲とのバランスを保つため高さ150m（38階）以上をツインタワーとした。なお、第二本庁舎は高さ163m、地上34階、地下3階、都議会議事堂は高さ41m、地上7階、地下1階



平面図、立面図提供：株式会社丹下都市建築設計

世界都市東京のシンボル

1985年11月、新東京都庁舎のコンペが公示された。当時丸の内にあった旧都庁舎の老朽化、各部署の建物の分散、執務スペースの狭隘化から、西新宿の淀橋浄水場跡地3区画への移転と職員約13000人を収容する庁舎の建築が決まった。行政棟と都議会棟、都民広場をどう配置するかがコンペの焦点となった。かねてより取り組んでいた超高層建築のスタディで得た知見から、丹下は所員とともに100に及ぶアイデアを検討。配置計画^{*7}とデザインの方向性を12月末に固め、年明けから構造、設備、防災対策を詰めていった。コンペ締め切りの2月末、72歳の丹下は所員とともに深夜まで図案を仕上げたという。9社競合の末、丹下案が選ばれた。



東京都庁舎全景。手前が都議会議事堂、右奥のツインタワーが第一本庁舎、その左が第二本庁舎

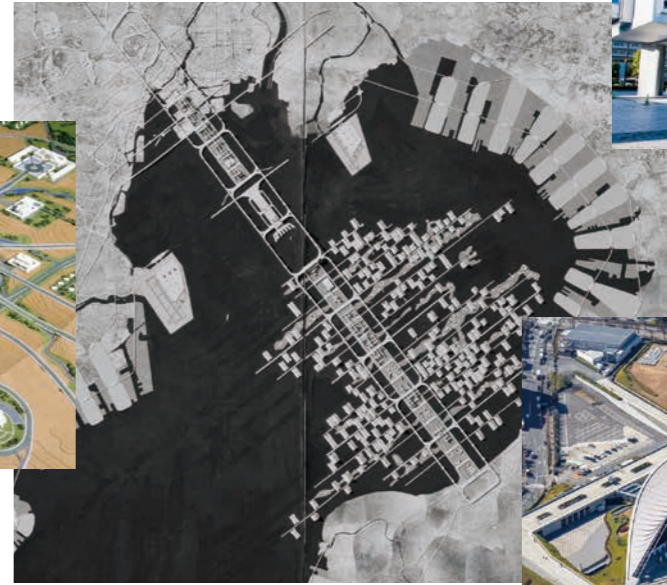


広島平和記念資料館（1955年）。同館を含む広島平和記念公園全体の設計も丹下が担った

マスタープランを担当した日本万国博覧会（1970年、大阪） 写真：新建築社 荒井政夫



東京湾上に都市を配置するという未来構想「東京計画1960」 写真：川澄・小林研二写真事務所 川澄明男



ナイジェリアの首都・アブジャの都心計画（1979年） 写真：©村井修



国立代々木競技場（1964年）。吊り構造による大空間を実現した

丹下 健三 たんげけんぞう

1913年、大阪府生まれ。1938年、東京帝国大学工学部建築学科を卒業し前川國男建築設計事務所に入所。1941年から東京帝国大学大学院にて都市計画を専攻し、1946年、東京大学工学部建築学科助教授に就任。1961年、丹下健三+都市・建築設計研究所（現・丹下都市建築設計）を設立。東京大学工学部都市工学科教授（1963年～）を経て、1974年に東京大学を定年退官し名誉教授に。2005年、逝去。

シンガポール OUBセンター（現ワン・ラッフルズ・プレイスタワー1、1986年） 写真：©村井修

に残した強烈なインパクトは、2人の合作によるものだった。有名建築を次々に生み出す一方、丹下は構想「東京計画1960」を発表する。当時すでに過密状態にあった東京の都心部が発展し続けるには限界がある。丹下は、東京湾上に新たな都市を創る大胆な未来像を世に問いかけた。

1963年の大地震で壊滅的な被害を受けたマケドニア（旧ユーゴスラビア）の首都スコピエの都心部再建計画を機に、1970年代にはイタリア・ポローニャ市の都市計画やアルジェリアのオラン総合大学、ナイジェリア新首都都心計画を手掛けるなど世界を飛び回った^{*3}。

1980年にシンガポールのOUBセンター（86年竣工）^{*4}を設計すると、丹下の視線は超高層建築へと向けられた。建築事務所^{*5}の所員とともに、当時超高層建築ブームが起きていたアメリカなどを巡り、帰国するとさまざまな形の模型を試作。斬新な構造で、都市の象徴となるスカイライン^{*6}を描ける超高層建築を模索し、スタディを重ねていった。

都市計画家^{*8}でもある丹下は、都市軸をつねに意識してきた。都民が集えるシンボリックな広場を東京の中心に据える。それを抱くように、都民を代表する都議会の議事堂が建つ。広場と議事堂の中央を走る都市軸の先に、第一本庁舎のツインタワーが建つ——設計当初からの

*7 本庁舎を2つの棟に分けた理由は次の2点による。① 都の規定により、容積率1300%以下とする。② 新宿副都心協議会の協定により、地上階の高さは250m以下とする。 *8 urbanist:「urbanity」と「-ist」を組み合わせた、丹下健三による造語。

*1 urbanity: 優雅さ、上品さなどの意味があり、丹下は主に「都市らしさ」の意味合いで多用していた。 *2 竣工当時の呼称は国立屋内総合競技場。 *3 いずれの計画も進行中。 *4 OUB: Overseas Union Bank (現名称はワン・ラッフルズ・プレイスタワー1)。高さ280mは、竣工当時アジアNo.1の高層建築だった。 *5 丹下健三+都市・建築設計研究所 (現丹下都市建築設計)。1961年設立。 *6 空を背景として、高層建築物や山岳の稜線などが描く輪郭線。



第一本庁舎1-2階の吹き抜け。低層階はホールや大会議室に使用されるため、エレベーターを新宿中央公園側に配置して柱をなくし、大空間が成立可能な構造とした。また、天井部分は人間の動線を意識してデザインしたところ、集積回路のようなパターンになったという



半円形に広がる都民広場。パチカンのサン・ピエトロ広場のほか、丹下が尊敬するミケランジェロ設計のローマ・カンピドリオ広場や、同じくイタリアのシエナにある半円形のカンポ広場を参考に設計された



都民と職員を迎える第一本庁舎1階エントランスホール



職員が行き来しやすいよう、各棟は空中歩廊でつながっている。写真は第一・第二本庁舎の3階をつなぐ部分



西側の新宿中央公園から見た東京都庁舎



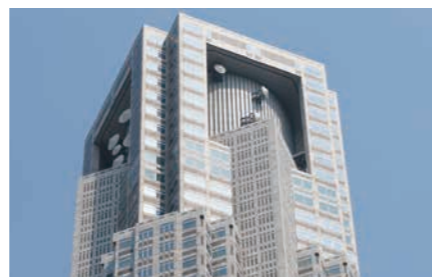
都議会議事堂の本会議場。議事と傍聴のしやすさを考慮し、楕円形に設計されている



外装材に濃淡2種類の御影石を使用することで町家の格子窓のパターンを描き、江戸以来の伝統を持つ東京の文化性を表現した



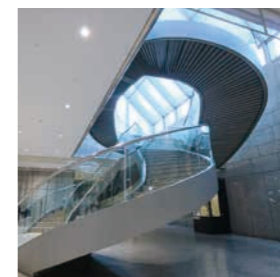
第一本庁舎1階の外壁。外装材に江戸切り目地という仕上げを施すことで、伝統的な石積みみの重量感を表現している



第一本庁舎の最上部は、パラボラアンテナの増築スペース確保のため45度ずらしてある。「建築物の輪郭線からアンテナが出てしまったら美しくない」という丹下のこだわりでもある



第一本庁舎45階の展望室。一般に無料開放され、ほぼ東京全域を見渡することができる



第一本庁舎1階の曲線階段。素材を薄く、軽く見せる工法が施されている

丹下が特に心を砕いたのが、南側の区画に位置する第二本庁舎との一体感をどう演出するかであった。そこで、第二本庁舎の上部を三つに分け、第一本庁舎に向かって段々に低くすることで、都民広場から見ると第二本庁舎が顔をのぞかせるという景観を可能にした。「建築はただの箱ではない。表情があるものを作らなくてはいけない」という丹下の矜持を垣間見ることが出来る。

丹下が新東京都庁舎の設計でめざしたのは、世界都市東京のシンボルとなる建築だった。江戸以来の伝統を持つ東京の文化性を木造建築における町家の格子窓のパターンに、世界の最先端を進む東京の先進性をコンピュータの集積回路のパターンに求め、外壁のデザインで両者の融合を図った。

新たな東京都庁舎は1991年、丹下78歳の年に完成した。このとき丹下が採用した建築哲学は、その後手掛けた新宿パークタワー(94年竣工)やフジテレビ本社ビル(96年竣工)にも見られる。

丹下は2005年、91歳で亡くなった。終生最も尊敬した人物が、彫刻家、画家、建築家として美を追求し続けたミケランジェロだった。「美しきもののみ機能的である」――生前の丹下の言葉だ。「建築は人に感動を与えるものでなくてはならない。美しくなければ、使われ続けることもない」。丹下晩年の代表作である美しきツインタワーは、世界都市東京のシンボルとして見事に機能し続けている。

イメージを持っていた。

各棟をつないだ空中歩廊の柱列が都民広場をぐるりと囲むことで「アーバニティの高い空間」を生み出している。「囲われてこそ広場であり、柱列は社会と建築の接点」との丹下の意図がここにある。

第一本庁舎をツインタワーとしたのは、高さ250mに迫る単純な直方体がそびえると、都民広場から続く都市軸がそこで止まってしまい、見る人に圧迫感を与えるからだ。丹下は建物を分節化することで全体のプロポーション(縦横比)を細く見せ、圧迫感を抑えると同時に、遠くから見てもそれとわかる固有のスカイラインを描くことに成功した。

丹下が特に心を砕いたのが、南側の区画に位置する第二本庁舎との一体感をどう演出するかであった。そこで、第二本庁舎の上部を三つに分け、第一本庁舎に向かって段々に低くすることで、都民広場から見ると第二本庁舎が顔をのぞかせるという景観を可能にした。「建築はただの箱ではない。表情があるものを作らなくてはいけない」という丹下の